

公益社団法人日本超音波医学会第 92 回学術集会を終えて

会長 森 秀明

(杏林大学医学部第三内科)

1. はじめに

2019 年（令和元年）5 月 24 日（金）～ 26 日（日）の 3 日間、グランドプリンスホテル新高輪（東京・品川）にて公益社団法人日本超音波医学会第 92 回学術集会を開催させていただきました。東京での学術集会の開催は 2015 年 5 月に開催されました日本超音波医学会第 88 回学術集会（東邦大学医療センター大森病院消化器内科 住野泰清会長）以来で、奇しくも同じ会場での開催になりました。今回の学術集会は元号が令和に改定された初めての記念すべき会となりましたが、天候にも恵まれ、3 日間で 6,860 名の参加者があり、盛会裡に終了することができました。

今回、長い歴史のある日本超音波医学会学術集会の会長の機会を与えていただきました本学会理事会の諸先生方を始め、関係各位に深く感謝申し上げます。

2. Ultrasonic Week 2019

本学術集会は貴田岡正史会長（前公立昭和病院内分泌代謝内科）のもと第 87 回学術集会（2014 年）の際に初めて「Ultrasonic Week 2014」と呼称し、超音波医学に関する複数の学会や研究会が一同に介して開催され、盛会裡に幕を閉じました。その後、担当する学術集会会長のお考えで Ultrasonic Week の形式をとらずに開催された年もありましたが、今回の第 92 回学術集会は「Ultrasonic Week 2019」として、複数の学会や研究会と共同で開催することを立案しました。具体的には、同時開催として第 42 回日本乳腺甲状腺超音波医学会学術集会、第 129 回腹部エコー研究会、日本母胎胎児医学会：産科超音波セミナー 2019、共同企画として日本超音波検査学会、日本膀胱学会、日本消化器がん検診学会、日本人間ドック学会、日本動脈硬化学会、基礎技術研究会、光超音波画像研究会の計 11 の学会・研究会が参画し、開催させていただきました（図 1）。これらの多くの学会や研究会が一堂に会することで、超音波医学に関する最新の技術や情報を効率よく学べる場を提供することができました。

またご参加いただける皆様やご協力いただける関連企業・団体の皆様の経済的、時間的負担を極力軽減するためにも「Ultrasonic Week 2019」の開催は有意義であったと思います。

3. テーマ

「Ultrasonic Week 2019」のテーマは「トライアングル color トライアングル」としました。このテーマのコンセプトは以下のごとくです。始めのトライアングルは「医師・技師・理工学研究者」を指しています。日本超音波医学会はこれらの 3 者の連携によって運営されている学会であり、この特色を活かした学術集会を開催したいと思いました。具体的には領域横断テーマの充実、たとえば日常臨床の場で医師や技師が検査を行う際、どのような技術を要望しているかを理工学研究者の先生方や企業の方々と討論し、その内容を共有することが新たな技術を開発する上で必要と思います。さらにもう一つのトライアングルは「診療・研究・教育」を指しております。医療従事者にとりましては診療・研究・教育という 3 本柱が永遠のテーマでもあります。1 名の医療従事者が診療・研究・教育のすべてに秀でていなくても、それぞれの得意な分野で学術集会に参加・発表していただくことは、日本超音波医学会のさらなる隆盛に必要な不可欠と思われます。「トライアングル」と「トライアングル」の間を結ぶ「color」



図 1 Ultrasonic Week 2019 参加学会・研究会

は前述しましたように、「医師・技師・理工学研究者」がそれぞれの立場で特色（color）を活かして「診療・研究・教育」の発表やディスカッションをしていただきたいという希望から挿入しました。以上のような観点に立って「Ultrasonic Week 2019」では診療・研究・教育のバランスのよいテーマを提案させていただきました。さらに現在、「医師の超音波離れ」や、理工学分野でも超音波の研究に携わる研究者の減少が問題になっておりますので、この面からも医師・技師・理工学研究者の3者が協力して若手の研究者を支援できるような学術集会をめざしました。医師・技師・理工学研究者というトライアングル、診療・研究・教育というトライアングルはどちらも毛利元就の「三本の矢の教え」にもありますように、3本束ねることにより安定した、力強い形になり、超音波医学のさらなる発展に寄与するものと思います。

4. 学術集会の概要

今回の学術集会は2020年に開催する東京オリンピックの影響で会場費が高騰したため、すべてに参加可能な共通券は本学会または同時開催の4団体に所属している会員は医師・工学は20,000円、メディカルスタッフは10,000円、初期研修医・大学院生は無料、非会員は医師・工学は25,000円、メディカルスタッフは15,000円、初期研修医・大学院生は5,000円とさせていただきました。また第42回日本乳腺甲状腺超音波医学会学術集会または第129回腹部エコー研究会、日本母胎胎児医学会産科超音波セミナーのいずれかのみ参加者は別途参加費を設定しました（図2）。

また学術集会関連取得単位に関しては第42回日本乳腺甲状腺超音波医学会学術集会、第129回腹部エコー研究会のいずれかの学術集会または研究会に単独で参加された場合の取得単位を設定し、共通券で参加された方にはこれらの単位を合算して取得できるように配慮しました。さらに2019年に指導検査士または検査士の資格を更新された技師の方から今後5年間で更新すべき単位数が変更になることに関連して学術集会参加の取得単位数も変更になったため、それ以前に更新された方の更新単位を分けて取得単位数を設定しました。

5. プログラム

特別プログラムとして、領域横断ではシンポジウ



図2 受付会場

ム6テーマ、ワークショップ1テーマ、基礎領域はシンポジウム4テーマ、循環器領域はシンポジウム10テーマ、パネルディスカッション2テーマ、消化器領域はシンポジウム3テーマ、パネルディスカッション6テーマ、ワークショップ4テーマ、産婦人科領域はシンポジウム1テーマ、ワークショップ4テーマ、小児領域はシンポジウム2テーマ、乳腺領域はシンポジウム2テーマ、パネルディスカッション2テーマ、甲状腺領域はシンポジウム2テーマ（国際シンポジウムを含む）、パネルディスカッション1テーマ、ワークショップ2テーマ、頭頸部領域はパネルディスカッション1テーマ、泌尿器領域はシンポジウム2テーマ、ワークショップ2テーマ、血管領域はシンポジウム5テーマ、ワークショップ1テーマ、運動器領域はシンポジウム4テーマ、パネルディスカッション2テーマ、共同企画として4テーマ（日本膀胱学会、日本超音波検査学会、日本消化器がん検診学会・日本人間ドック学会、日本動脈硬化学会）、日本超音波医学会委員会企画プログラムとして4テーマ（超音波検査士制度委員会、指導検査士認定試験実行小委員会、男女共同参画委員会、機器安全委員会）の合計77テーマ、計410演題と一般演題450演題、奨励賞演題18演題、研究開発班費交付研究成果発表会演題3演題、ランチョンセミナー15、ハンズオンセミナー6、デモンストレーション2、第18回教育セッション15演題に加えて2019年度から開始された必修講習会（超音波専門医、超音波検査士更新のための講習会）、指導検査士認定試験のための講習会が開催されました（図3、4）。

今回の学術集会の特徴は例年にも増して各領域の実行委員の先生方からご提案いただいた特別企画案



図3 Ultrasonic Week 2019 開会式



図5 会長講演



図4 会場風景（第1会場）

数が多く、用意しました15会場にほとんど空いた時間帯がない状況で、大変充実したプログラムを組むことができました。一般演題はなるべく多くの方に参加していただきたいと思い、すべて口演発表として、ポスターセッションは行いませんでした。また、ランチョンセミナーでは各領域の最近のトピックスを学ぶことができ、ハンズオンセミナーやデモンストレーション会場では超音波診断装置を用いた実技を体験することができ、好評でした。第18回教育セッションでは例年同様、各領域の初級者向け・中上級者向けの講義が行われ、多くの方が参加されました。また今年度から開始された必修講習会は事前登録制でしたが、受講希望者が多く、申し込み開始から数時間で満席になる盛況でした。

6. 会長講演

「超音波医学に対する取り組み—日本超音波医学会における委員会活動と執筆活動」というタイトルで会長講演をさせていただきました（図5）。

私は研修医時代に先輩の医師や技師の方々が腹部

超音波検査を施行するのを見学し、その後、ほぼ独学で超音波診断学を学んできました。その当時の腹部超音波検査はBモード画像が主体でしたが、その後、パルスドプラが開発され、腹部領域の血管の血流速度や血流量が非侵襲的に計測可能になりました。その後、カラードプラが超音波診断装置に搭載され、腹部領域の血管に加えて肝腫瘍などの血流評価を行えるようになりました。この間、苦勞しながら先駆者の先生方の執筆された超音波診断のテキストを拝読し、また日本超音波医学会学術集会などに参加して学んだことを世に出したいと思い、1996年に初めて原著（スタンダード腹部超音波診断、診断と治療社）を刊行しました。その後も日々の多忙な医療現場での仕事の合間を縫って今までに11冊の原著・共著を上梓してきました。またそのうちの2冊は海外で翻訳されて出版されております。

私が日本超音波医学会の活動に関わらせていただくようになったきっかけは恩師の跡見 裕先生（本学会名誉会員、現杏林大学名誉学長）が本学に赴任されたことからでした。初めて日本超音波医学会の評議員に就任させていただいたのは2000年5月で、その後、代議員を経て、2014年から理事（現在、総務担当理事）に就任させていただき、今日に至っております。また委員会活動は2000年から保険委員会委員（2014年から委員長）、2002年から検査士制度委員会委員（2010年から副委員長、2014年から委員長）、2008年から用語・診断基準委員会委員に就任させていただいております。また超音波検査士の資格は書類審査と試験のみであり、実際の技量を担保することができないため、2012年度から書類審査と試験に実技試験・面接試験を加えた超音波指導検査士（腹部領域）認定試験の立ち上げに参加

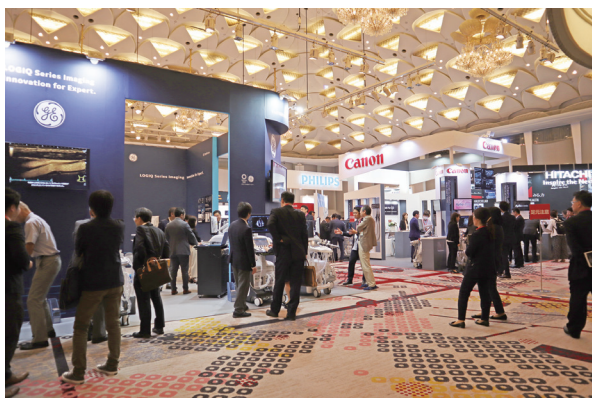


図6 機器展示1



図8 書店展示



図7 機器展示2



図9 ファイアサイドトーク Tokyo Style

し、初代実行小委員会委員長に就任させていただき、現在に至っております。

その他にも、今まで専門医制度委員会委員、倫理委員会委員、企画委員会委員、顕彰委員会委員、地方会委員会委員、次世代超音波画像データベース構築委員会委員などを歴任させていただきましたが、これらの委員会活動を通して、さまざまな領域の医師の先生方、工学系の先生方、技師の方々からご指導をいただき、また交流を深めさせていただいたことは、今回の学術集会を主催するにあたり、大きな財産になっております。さらに2019年度から関東甲信越地方会委員長に就任させていただくことになりましたので、微力ではありますが今後も超音波医学の発展のために力を注ぎたいと思い、今までご指導いただいた各委員会の先生方に感謝を申し上げますとともに、会長講演とさせていただきました。

7. 企業展示

企業展示は3日間にわたってグランドプリンスホテル新高輪の国際館パミールで開催し、計20社の

展示申し込みがありました。各社の最新の超音波診断装置を体験することができるため、多くの方々が展示会場に来場され、各ブースとも大盛況でした(図6-8)。

8. ファイアサイドトーク Tokyo style

会期2日目の夜に恒例のファイアサイドトーク(懇親会)を開催しました。今回は4年ぶりに東京で開催される学術集会でしたので、サブタイトルに「Tokyo style」を入れて、東京ならではのおもてなしを行いたいと思いました。この会は学術集会での発表や白熱したディスカッションの合間の息抜きのある場でもあり、おいしい食事やお飲み物ともに参加者が自由に語ることができる貴重な場です。また普段あまりお話しする機会がない他の職種の方々との語らいの場ともなり、楽しいひとときをお過ごしただけだと思います(図9)。

会の途中で論文賞、奨励賞、新人賞、特別学会賞、松尾賞の表彰や功労会員の表彰を行いました。

またアトラクションとして会長のたつての希望で



図 10 ファイアサイドトーク Tokyo Style (アトラクション)

フュージョンバンドの T SQUARE の板東 慧さんを中心としたバンドである bandband に演奏をお願いしました。bandband のメンバーの方々はこの日のためにバンド名を 1 晩限りの「Enjoy Tokyo-style Fusion Band」に変更し、2 部構成ですばらしい演奏をしていただきました (図 10)。

9. 参加者数

共通券を購入された参加者数は 6,218 名、第 42 回日本乳腺甲状腺超音波医学会学術集会の単独参加者数は 187 名、第 129 回エコー研究会の単独参加者数は 42 名、日本母体胎児医学会：産科超音波セミナー 2019 の単独参加者数は 90 名、スタッフ・プレスその他の 323 名を加えると、計 6,860 名の参加者でした。

なお共通券を購入された参加者数 6,218 名の内訳は正会員（医師・工学 1,924 名、メディカルスタッフ 2,165 名、初期研修医・大学院生・学生 61 名）、非会員（医師・工学 366 名、メディカルスタッフ 1,643 名、初期研修医・大学院生・学生 59 名）でした。

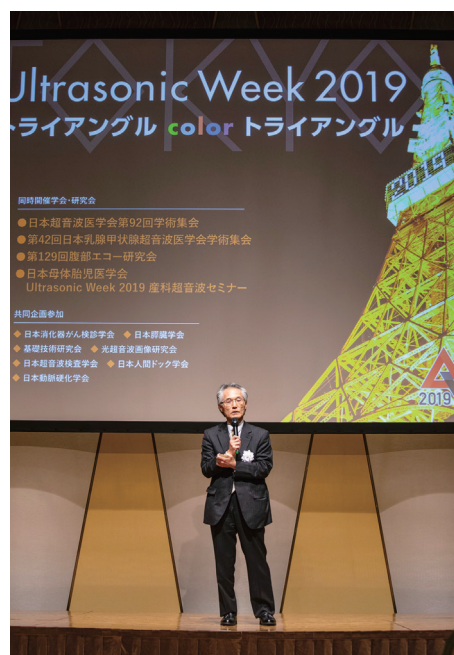


図 11 Ultrasonic Week 2019 閉会式

10. おわりに

3 日間の学術集会の会期中大きなトラブルもなく、無事開催することができました (図 11)。

最後に今回の学術集会の準備期間、ご多忙の中、学術集会の成功に向けてご指導いただきましたスペシャルアドバイザーの皆様、また英知を傾け充実したプログラムをご提案いただいた実行委員の皆様、同時開催・共同企画でご尽力いただいた各学術集会・研究会の会長の先生方、ご支援いただきました各企業の皆様、学術集会連絡事務局を担当していただきました株式会社コンベックスの皆様、杏林大学消化器内科学教室の皆様、会期中に各会場係を担当していただいた皆様に心から感謝を申し上げます (図 12)。また会期中ご来場していただいた多くの皆様もご参加ありがとうございました。



図 12 スタッフ記念写真

今回の学術集会を終えるにあたり，医師・技師・理工学研究者の3者が協力して臨床の場で有用な超

音波新技術の開発と普及を推進していくことで，いっそうの社会貢献ができることを切に願っております．